蝶と蛾 *Trans. lepid. Soc. Japan* **59** (3): 225–240, June 2008

Fentonの日本訪問と大英博物館 *

中村和夫[1)]・松田真平[2)]

[1)] 320-0037 栃木県宇都宮市清住3-5-17
[2)] 543-0024 大阪市天王寺区舟橋町2-6-201

M. A. Fenton's visit to Japan and The British Museum

Kazuo NAKAMURA[1)] and Shinpei MATSUDA[2)]

[1)] 3-5-17, Kiyosumi, Utsunomiya-shi, Tochigi, 320-0037 Japan
[2)] 2-6-201, Funahashi-cho, Tennoji-ku, Osaka, 543-0024 Japan

Abstract M. A. Fenton, a pioneer lepidopterist in Japan, had been well-known as a respected English teacher in Tokyo, but the motive and time of his trip to Japan has been quite unknown.

The articles informing the marriage of M. A. Fenton's sister at Edo on 2nd Aug. 1873 were found in English newspapers published at Yokohama. It was confirmed from other articles that "Mr. Fenton" arrived at Yokohama on 28th July 1873 by a British steamer from Hongkong.

The attendance at his sister's wedding was presumably the direct reason for Fenton's visit to Japan. On his arrival in Japan, he found a job to work in Japan as an English teacher of a foreign employee. It might have supported financially his long stay in Japan afterwards. As an amateur naturalist of the Victorian age, his primary motive to visit Japan might have been enhanced by the acute interests over the Japanese insect fauna.

He left Japan on 4th Apr. 1880 after his 6-year and 8-month stay in Japan. During that period, his collecting tours were made thrice in the eastern mainland of Japan and twice in Hokkaido, resulting in many new findings of butterfly and moth species. After he went back to England, he worked as H. M. Inspector for decades.

Correspondence between Fenton and Riley, N. D. of The British Museum is shown in this paper. In the 1913 letters, Fenton sent lepidopterous specimens from Canada two times, requesting BM to purchase them. His collection of the Japanese butterflies including type specimens were already deposited in the Museum at the time of 1921. As appeared in the letters of 1923, after consultation between them, the specimens were registered by BM in 1923.

Key words M. A. Fenton, foreign employee, Yatoi English teacher, *Avoca*, Rymer-Jones, marriage ceremony, butterfly, The British Museum, A. G. Butler, N. D. Riley, H. M. Inspector.

1. はじめに

明治の初頭に日本を訪れ, 蝶蛾の採集と記載に貢献した英国人Montague Arthur Fentonについては, 近年その生涯・人物像が概略判ってきた (松田・中村, 2005; 中村, 2007). そこでは単なる採集家ではなく, 豊富な知識を持ち, 若き日の石川千代松を通じ日本に近代的な昆虫研究法を伝達した昆虫学者の側面が推測出来るようになった. これまでは英国から招かれ日本に滞在した英語教師「蝶好きのお雇い外国人」で (江崎, 1955), 本務の傍ら昆虫採集に励んだと言う人物像であった. しかし最近, 彼が英語教育の為に日本に招聘されたとは考えられない記録が見出され (松田・中村, 2005), 本来の訪日の具体的な動機と時期が改めて関心事となった.

Fentonが得た大部分の昆虫資料は蝶・蛾を中心に大英博物館 [「自然史部門」の建設・移転が1880年代, 組織的独立は1961年なので略称] のA. G. Butlerらの手を通じて記載された. このことからFentonが訪

* 本報の骨子は日本鱗翅学会54回大会で報告した (2007年, 新潟).

日前に同館と密接な関係をもち, 相当程度の準備を整えて日本を訪問したことは推測出来た.

今回, 来日の理由と密接に結びつくと判断できる新聞記事を見出し, 来日の動機及び時期をほぼ確定することが出来た. 英語学校がFentonの来日後, 教師雇用を上申した文書も特定できた. また彼が大英博物館専従者との交信した記録を入手し, Fentonと大英博物館の関係, 蒐集した日本産蝶類の標本の処置経過を知ることが出来た. これらの事実から, 従来の見方, 即ち「お雇い外国人・英語教師」が副業に行った「昆虫採集」ではなく, 昆虫相調査がFenton日本訪問の意図的目標だったと見なすのが妥当と思える. [以下, 敬称略]

2. 来日に関する記録

当時横浜で発行された英字新聞各紙には出入港した船舶名と乗船者名簿が記録されている. 紙面の都合で稀に名簿が省略される船もあるが貴重な資料である. Fentonの英語教師発令 [1874年1月24日] から遡って該当事項を捜し, 1873年の *The Japan Weekly Mail* [8月2日] に関係記事を見出した. 同様の記事はThe Japan Gazette [8月5日] 及び *The Japan Mail* [8月6日] にも掲載されていた (北根・鈴木, 1997). 即ち, 香港発で横浜着1873年7月28日の英国汽船*Avoca*号の乗客名簿に, Miss A. Fenton, Mr Fentonの名前が見られた. Fig. 1には保存紙面の薄い *The Japan Gazette* の復元を示す. ここでは28日着と読めるが, 他2紙では22日着とある. 香港-横浜間の*Avoca*号就航が一周期約28日であること (Table 1), P. & O. 社の教示 [7項後述] から22日着の記事は28日の誤植と判断した.

The Japan Gazette Mail Summary
YOKOHAMA, TUESDAY, August 5th, 1873.

ARRIVALS.

July 28, Brit.str. *Avoca*, Andrews, 1,008, from Hongkong, general, to P. & O. Co.

Per *Avoca* from Hongkong.
Miss A. Fenton, Mr. Fenton. Commander Douglas, Lieut. G. W. Jones, Lieut. C. W. Baillie, Messrs W. F.
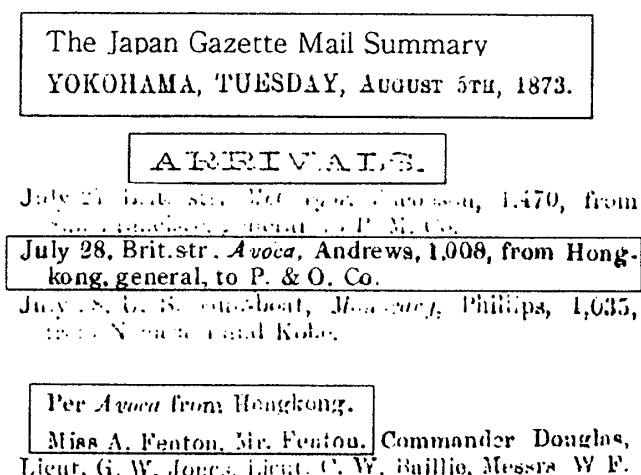
Fig. 1. Fenton日本到着の英字新聞記事 [*The Japan Gazette* 1873年8月5日] (北根・鈴木, 1997) [不鮮明な紙面を修正・復元].
The newspaper article informing the arrival of Fenton in Japan [*The Japan Gazette*, 5th Aug. 1873, retouched from faint original print].

Table 1. 横浜での*Avoca*号出入港記録. 北根・鈴木 (1995, 1997)
Table 1. Arrival and departure records of the British steamer *Avoca* at Yokohama Bay. (After Kitane & Suzuki, 1995, 1997)

Date (月日)	In or out (出入港)	Newspaper (掲載紙)
3rd, June	Arrival (from Hongkong)	a, c
11th, June	Departure (for Hongkong)	b
1st, July	Arrival	c
9th, July	Departure	b, c
28th, July	Arrival	b, a & c (rec. 22nd)
6th, Aug.	Departure	a

a) *The Japan Weekly Mail*, b) *The Japan Gazette*, c) *The Japan Mail*.

MARRIED.

On the 2nd August, at H. B. M.'s Legation, Yedo, RICHARD OLIVER RYMER JONES, fourth son of Thomas Rymer Jones, F. R. S., F. R. C. S., of Kensington Park, London, to ISABELLA MARY FENTON, fourth daughter of Charles Ducker Fenton, M. D., Doncaster, Yorkshire.

Fig. 2. Fenton姉の結婚記事 [*The Japan Gazette*, 1873年8月5日] (北根·鈴木, 1997).
The article of marriage ceremony of I. M. Fenton [*The Japan Gazette*, 5th Aug. 1873].

First Nameがなく, この記事でM. A. Fenton本人とは確認できない. 同じFenton姓の未婚女性名と並ぶ記事だった. これは教師発令より約6ヶ月早いが, この間同記事以外に該当する乗客名はなかった.

3. 日本での姉の結婚記録

やがて同日の新聞*The Japan Gazette* [8月5日] 冒頭部分にFig. 2の記事があることが判明した (松田, 2007). 即ち, Fenton姓の女性Isabella Maryが8月2日江戸·英国公使館で結婚した内容で, 父親の名前も記載される. *The Japan Mail* [8月6日] にも同じ記事があった. 既に知り得たM. A. Fentonの父親名[Charles Ducker Fenton] との一致から, この女性がM. A. Fentonの姉妹と確認できた. 英国Doncaster市役所の記録でIsabellaは1848年1月20日生と知り, Montagueより2歳年上の姉と判った.

この事実から, 7月28日 [挙式5日前] に横浜に到着した船の乗客Miss A. Fenton, Mr Fentonは花嫁関係者で, 結婚式の為来日したとの見方が有力となった. 一方Doncaster市役所の調査でA. Fenton名の該当者は探し出せず, 今の所これがI. Fentonの誤記であった可能性が強いと判断している. 先行するI. M. Fentonの来日記録, 式以後A. Fenton単独の出国記録が見いだせないことは誤記との推測の傍証となる. 以上の事からほぼ確実にM. A. Fentonは結婚する姉I. M. Fentonの来日旅行に随伴し, 式に列席することを決定的な好機に1873 (明治6) 年7月28日横浜に入港したと推定した.

英国公使館は当時東京麹町五番町 [=千代田区一番町] に建築中で, 既に業務を行っていた (1874年完成). 別に高輪泉岳寺にゲストハウス「高輪接遇所」(1866年完成) があり, ここが式場となった可能性もある. 英国大使館は1923年関東大震災で崩壊し以前の記録は見ることが出来ない.

4. Rymer Jonesと周辺人脈

姉の結婚相手Richard Oliver Rymer Jonesは次の人物の姓名と一致する (ユネスコ東アジア文化センター 1975: 本書ではRymer-Johnes, R. O.). 1872年11月2日工部省·測量司 [職名は測量師] に採用されたお雇い英国人で, それ以前は月雇の試験的な採用だった (太陰暦使用時なので月日表示には注意が必要).

1870年10月創設の工部省は [百工勧奨ノ] 役所で10寮と測量司から成った. 1877年工学寮を廃して改称した工部大学校と共に測量司は1882年8月工部省直轄となり, 1885年12月同省廃止に伴い文部省に属した [後の東京大学工学部] (大蔵省 (編), 1931). Rymer Jonesは工学寮 [次いで工部大学校] に配置換えとなった. 職務は数学兼測量教師で1878年8月31日までの勤務歴が残る. 採用に当たって「ライメルジョンズ条約」を策定した (旧工部大学校史料編纂委員会, 1978).

結婚式記事に残る父Thomas Rymer Jonesは, 称号F. R. S. [英国学士院特別会員], F. R. C. S. [英国外科医学会会員] からCambridge大·比較解剖学教授だった人物 (1810–1880) と考えられる. Isabellaの父Fenton, C. D. とT. Rymer Jonesが共に医師と言う縁でこの結婚を想定するのは不自然ではない. 父の名がJohn Chatwin JonesというScotlandの土木技師だったR. O. Rymer Jonesという人物の情報 (北, 1984) とは矛盾が残る.

だが別の問題が残る. 当時, 工部省初め日本の工業技術分野の各組織はScotlandに源を持つKelvin卿 (1824–1907: 22歳でGlasgow大教授に就任した英才) 系列の強固な人脈が支配的であった (北, 1983–84). Scotland主要4大学の出身者ではないRymer Jones R. O. (北·私信) がEngland出身でありながら工部省に所属できた経緯は未解明である. Kelvin卿は (未だWilliam Thomson名だった) 20歳当時Cambridge大に学んだので14歳年長のT. Rymer Jonesとの知己を得た可能性も想定される.

後に田中舘愛橘は最初の留学先 (1888–1890年) にGlasgow大学を選んだ. 東京大学での初めの師Mendenhall, T. C. (1841–1924) は米人だったが, 2代目の師Ewing, J. A. (1855–1935: 田中舘より1歳年長: 夫人は米国生まれ) は英人でGlasgow大卒だった. 田中舘は同大でKelvin卿の指導を得て実験物理学を学び, 滞在中4度講演するなど「研究教授」的待遇を得たらしい (北, 1984). 田中舘はKelvin卿とともにかつての師Ewingが, 1883年Dundee大に応募する時の推薦者となって恩に酬いた (北, 1983–84).

日本に於ける「サッカー発祥を指導」とされたのはこのR. O. Rymer Jonesで (旧工部大学校史料編纂委, 1978), Dixonの記述によれば工部大学校の日本人学生が勉学一点張りで「青白い顔と憂うつそうな表情」なので, 健康のため戸外スポーツを奨励した (石附, 1986) という. ここには英国 (Scotland) 流の「全人的教育」とドイツ流「専門教育」の間の葛藤もあった (北, 1987).

田中舘日記にはFentonらが関甲信旅行の途中1876年8月奥日光でRymer Jhones [綴り異なる] と会い一緒に男体山に登った記録があり (中村, 2002), この義兄と同一人物と思われる.

5. Fenton来日以前の周辺環境

この点についての情報は少ない. 来日前の教育経歴も不明だが, 日本での教師採用時には何も考慮されていない. 父親が医師の中産階級家庭に生まれ, 通常の中等教育を受けてビクトリア朝当時の流行であった「博物学」に関心を抱く環境にあった可能性は大きい. 英国Scotlandの人材が技術・知識を備えて海外雄飛を図った気風 (北, 1998) もEnglandの人々に影響があった可能性は否定できない.

日本到着後に発揮した採集品の処理状況から大英博物館, 特に館員A. G. Butlerとは来日前に密接な交流があったと推定される. Fentonの出生地DoncasterはLondonから北に約240 kmの地で, 1849年に開通した鉄道を利用して昆虫少年FentonはBloomsburyにあった大英博物館・旧館の虫部屋に出入りしたのだろうか.

Arthur Gardiner Butler (1844–1925) (Fig. 3) はFentonより6歳年長で, 父Thomas Butlerは大英博物館の図書館勤務だった. 大英博物館Gunther, A. E. (部長Keeper) の元で1863年職員 [動物部門・助手Assistant, 後に1879年部長補佐Assistant Keeper] となり, 未だあまり膨大でなかった未整理資料の整理に当たった. Fentonが同館を訪問したとすればこの時期前後だろう. Butlerはその後, シロチョウ科・シジミチョウ科を中心に急激に集積する各地資料の整理・記載に当たり生涯500篇を超える論文を書いた. 専ら標本を対象に季節型や地方型を独立種と記載する手法は批判も受けたが, 彼なくして多数・多方面の博物館資料は整理され得なかった. 1901年病気で退職後は虫を離れ, 庭園と飼鳥を愛した (Riley, 1925; Pocock, 1926).

Fig. 3. A. G. Butler像. 1895年51歳当時. (Gunther, 1975所載).
A portrait of A. G. Butler at 51-year old (cited from Gunther, 1975).

6. 来日の計画と準備

当時の英国ではDarwin, C. (1845), Wallace, A. (1853), Bates, H. (1863) らが次々と各地への海外遠征紀行本を出版していた. 自国内の調査は既にかなり行き届いていた英国の博物学にとって, 未知の諸外国での調査が若者達の関心事であった.

同年齢のH. Pryer (1850–1888) は, 先着の兄W. B. Pryerから日本に関する好ましい情報 [気候は温和・昆虫が豊富・物価は廉価] を得て, ほぼ同じ時期 (1871年頃) に中国経由で日本に来た (名和, 1910). Fentonも事前に同様の知識を得て, 訪日を企画・準備した可能性はある. このような環境下でFentonが姉の結婚を好機に, 昆虫相調査を自らの課題として未知の日本を目指した, と推測出来る. 日本産蝶類に関するそれまでの記載など予備知識は大英博物館・図書館で学習して備えたであろう. 当時までの日本の蝶に関する記録は確実性の乏しいものだったし, 日本の蝶に関する図鑑は未だ出版されていなかった.

石川千代松は1876 [推定] 年夏, Fentonの自室を訪れ, 多くの蝶蛾標本に一々学名が付いていることに驚いた (石川, 1936). Fenton

がButlerへ送った採集標本も既知種と未知種は区別していて,相当の予備知識を備えた上での来日だった.来日3年目の1876年にはFentonが当時として完成度の高い日本産蝶類目録を作った(中村,2007)ことを見ても,早くから広汎な見識を備えていたと推測される.

虫好きの趣味が高じた「外国旅行」であれば,一夏のバカンス程度の滞在もあり得ただろう.しかし,Fentonは家族の理解にも助けられ少なくとも「数年の滞在」を予期して出国したと推察する.目的地の昆虫相を入念に予習し,採集・標本作製・収蔵の諸用具など,来日に際して周到な準備があったと思われる.後に1877年3月28日及び1878年8月30日付でFentonは東京からJanson商会宛の手紙を出し,昆虫針各種の送付を依頼した(大英博物館Janson box所蔵).準備品が欠乏して補充が必要となった.前便では請求を父親宛に,後便には自ら郵便為替を同封した.

7. 日本への経路と所要期間

Fenton来日の経路は香港–横浜間の記録しか明確でない.Paris・Marseilles直通鉄道[1855年開通],Suez運河[1869年開通]の事情を含め,先例を参考に経路・所要日数を考察した.

1861年福沢諭吉は遣欧使節に随行して欧州諸国を巡遊した(福沢,1962).英国軍艦でSuezまで行き(運河開通前),Alexandriaから別船を経てMarseillesへ,Marseillesから鉄道でParisを経由し,Calais-Doverを渡って英国へ達した.中継地での滞在日数を差し引くと[品川–London]間の実質所要日数は約2ヶ月であった.また,1866年幕府派遣の留学生は途中迄ほぼ福沢と同じ行程を辿り,Alexandriaから海路Gibraltar海峡を経て,英国Southampton港へ到着した(川路,1953).「陸路フランス経由は相当の経費を要する」として海路を選んだ.[横浜–Southampton]間日数は3ヶ月3日であった[但し上海に寄港].

P.& O.社関係者の教示(歴史家・文書係Stephen Rabson氏)によると,Fentonらにとって最も有力なのは次の経路・日程である.1873年5月22日*Lombardy*号[処女航海]が英国Southampton出港.Gibraltar, Malta, Port Said [6月8日], Suez, Aden, Bombay [6月24–30日], Galle, Penang, Sigaporeを経由して 香港着 [7月21日].同船は上海へ向かうが,香港7月21日発*Avoca*号に乗換え横浜着は7月28日.全日数は[Southampton–横浜]間で2ヶ月6日となる.

このように仏国陸路を経ずSuez運河経由では類似の東洋便より少し日数がかかるが,船の乗り換えがなく経費も少ないこの旅程をFentonらが選んだ可能性が強い.2ヶ月強で日本に到着したとするとFenton姉弟が生家Doncasterを出発したのは1873年5月中旬と推定される.

8. 英語教師採用の記録と当時の日本

岡野(2001)が記録した通りFentonの日本での発令は1874年1月24日東京外国語学校だった.大政類典文書にはFentonが「来朝中人物」の中から選任されたとあったが(松田・中村,2005),これを裏付ける前年9月20日付開成学校(第一番中学)から文部省への伺文書があった(Fig. 4).学校は英語学教師に不足を生じ,「幸来朝人中学力有之」と既に候補に目星をつけて申請した.折り返し文部省承認(10月20日付)を受け,その結果が上記太政類典文書の採用届(1月29日付)に結実したと見られる(この頃,学制・校名は目まぐるしく変更になった).

従前から同校教頭であった米国人Verbeck, G. F.は外国人教師中に紛れ込んでいた「イカサマ師」を一掃する努力をしていた(バークス,1985).彼はよい教師は「牧師や宣教師以外」からは得られないと考えていた(内藤,1987).結果として石川(1929)が記したように外国人教師は「十中の八九迄は宣教師」だったが,まだ適任と言えない人物も居た.この状況の中で来日滞在中のFentonが英語教師候補に指名され,承諾したと考えられる.その後発揮された彼の誠実な人柄が好感をもって評価されたのだろう.学校側の人選は1873年9月に始まって居り,Fentonが5月の英国出発前にこの求人情報を得ていた可能性は無い.英語教育の教師達は,記録の得られた範囲(約50%:ユネスコ東アジア文化センター,1975)では全て東京・横浜など日本で採用された.各専門分野の職務内容を目的に,欧米各地から赴任旅費を加えて招聘した専門教授達とは異なって,語学教育担当者はFenton同様「お雇い外国人」でも赴任費用を支給しない現地採用人事だった.

当時の日本では東禅寺事件(1861年5月及び1862年5月:英国公使館襲撃),生麦事件(1862年9月:英

文部省往復　東京大学大学史史料室　蔵

三六五

「當校英語学下級生徒逐々増
加致し候處是迄音教官ヲ以テ教
授致し居候處生徒追々進脩シ
何分音教官之教授ニテハ行届無
候場合ニ至リ申候仍テハ幸来朝人
中學力有之一ヶ月金百三十円位
之給料ニテ雇入相成候人物有之
候間御雇相成右生徒を為受持候
ハヾ更ニ進歩も速ナルベク存候間御評
儀之上御雇入之儀至急御指揮
有之度此段相伺候也
明治六年九月廿日　田中弘義
伴　正順
正五位　田中不二麿殿
伺之通
但人物精選之上試検仮雇入之儀
可伺出事
明治六年十月十三日
[文部省三等出仕正五位　田中不二麿 印]」
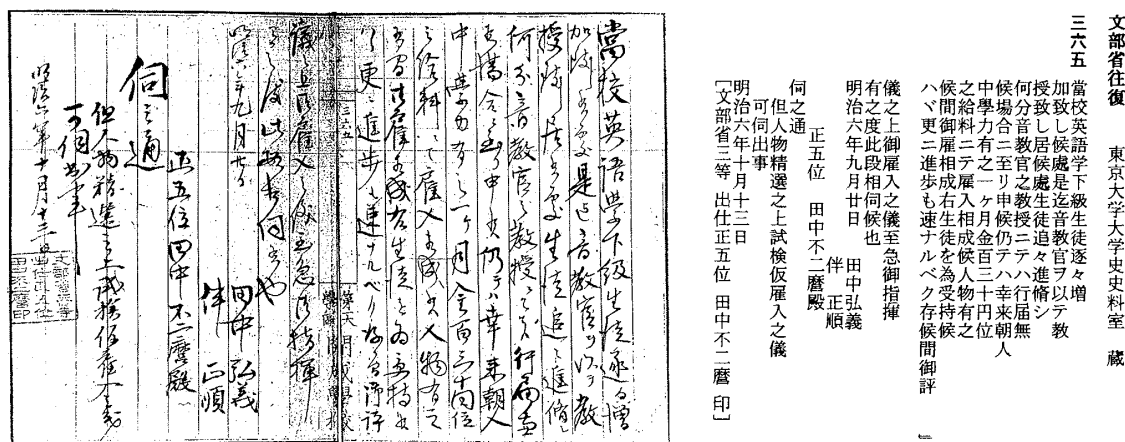
Fig. 4. A. 文部省往復・英語教師の人選文書 (東京大学大学史史料室·蔵). B. 同: 活字化. Correspondence on the employment of English teachers, between Kaisei English School and the Ministry of Education (a) and its typing (b). (Coll. Archives Section of the Tokyo Univ.).

国人殺傷事件), 薩英戦争 (1863年8月: 事件の賠償をめぐる日英対立) など不穏な状況にあった. 日本から英国への通信 (イラストレイテッド·ロンドン·ニュース, 1973) では専らその経過が関心の的となっていた. 来日したFentonらにとっても不安があったであろう.

姉の結婚式後, Fentonは行動の認められた横浜「居留地」近辺で採集していたのだろうか. 既に1872年横浜Adamson, Bell商会勤務にはH. Pryerの名が見られ (立脇, 1996), 採集を始めていた (名和, 1910). 当時横浜だけで1,300人の欧米人が居住し, その半数は英国人で生活に必要なものは入手できた (Dixon, 1882).

9. 日本滞在の裏付けと大英博物館との関係

H. Sloan卿の蒐集を基礎に1753年発足した大英博物館だが, 18世紀中–19世紀初頭にあっては標本の売却·滅失·焼却など信じがたい管理状態にあった (リン·バーバー, 1995). 信頼できる収蔵・利用体制を確立できたのは19世紀半ば近くの時期だった. 財閥Rothchildがコレクターを世界中に送って蒐集に務めた時期も, 大英博物館が経費を負担して「採集員」を派遣した形跡はない (Gunther, 1975; Stearn, 1981). WallaceやBatesらの遠征も南米·東南アジアへの渡航費用, 滞在費用は現地で採集した資料の販売で捻出した. 彼らは予め母国に有能な仲介者を選任して出発し, 滞在先から資料を送付して販売させ, 現地で「手形」を得て生活した (ウォレス, 1993; ベイツ, 1996).

Fentonが大英博物館の派遣した「採集員」であった可能性は, 後年Fentonが同館に自己標本を売却している事実 (後述15項) からも否定できる. 医師の家庭に生まれ, 経済的な余裕があったと見られる若いFentonの日本訪問は自己 [若しくは家庭の] 責任だったろう. この点は労働者出身のBatesやWallaceとは違った背景だろう.

到着した日本で幸い英語教師の職を得てFentonの在日は経済的に安定した. 更に公的機関への就職は国内各地に赴く認可·保証を得る上で大きな利点だった. その後の長い期間を日本で過ごすに至ったのは, 当初からの目的意識並びに接した日本の自然·社会·人間への興味と愛着と共に, この身元保証が大きかったと思われる.

10. 離日の記録と帰国

*The Japan Weekly Mail*に1880年4月4日横浜出港の仏船*Tibre*号 (香港行) でFentonの出港記録 (Fig. 5) がある. 田中舘日記 [ミュージアム氏家, 2003: 36] にも同日「フェントン氏ニ別ヲ告リ」と記録される. 雇入満期 (4月10日) より前だが, 学校側は休暇 (7日) 等で便宜を図った (東京大学史史料室·文部省往復·明治13年甲第55, 63号). 同じ頃Fentonの「在職中ノ功労ヲ賞スル為メ」退職時150円を交付 (3月

15日),「紙幣百円ニ代價五十円ノ大和錦一巻相添明廿九日贈」(3月30日) とある [当時月給250円] (東京大学史史料室・文部省往復・明治13年甲第46, 58号]). Morse, E.も退職時に東京大学から大和錦1巻を贈られている (磯野, 1987).

結局Fentonの日本滞在は通算6年8ヶ月で, この間関東・東北・北海道を各二巡するなど, 恐らく所期の目的を果たした上での帰国だった. 当時の主要な東大予備門・外国語教師16人 (東京帝国大学, 1932: Fentonの雇入時期を明治7年7月と誤記) の中でも最古参かつ最も長期に及ぶ勤務歴だった.

復路の交通事情には往路と大きな変化はない. 1880年6月初旬には英国に帰着し, 7月18日Doncasterから石川へ手紙を出した (中村, 2007). 1873年5月の出国以来7年強, 22歳11ヶ月から30歳迄の長い青年時代を在外遠征で過ごしたことになる.

11. 帰国後の学業・職業など

前報 (松田・中村, 2005) に示したごとく, 翌1881年にはSt. Johns Collegeに入学し, 1884年Cambridge大学を卒業した. 1884年7月にはWorthing Collegeからの手紙があり (中村, 2007), 卒業後一時の職があった可能性を思わせる.

1885年春に大英博物館Gunther, A. E. [1830–1914: 当時, 動物部門部長] へ宛てた手紙がある (Appendix 1). Fentonは同館・鞘翅目の求職を考えたが, Cambridge大での仕事と両立が難しいことを告げた. 35歳にして興味と給与 [日本では好待遇だった] の問題で職業選択に迷う時期だったのだろう.

1887年には一年間Cambridge大学比較解剖学の実験助手を務めた (Internet資料・C. Fenton私信). 前述の義兄・父Thomas Rymer Jonesは同大学比較解剖学・Funellian職教授だったが, Fenton帰国の年 (1880年) 12月10日既に死去した. 定職を求めての試行錯誤の時期であった.

12. 勅任視学官時代

1889年6月英国人女性H. E. Binnyと結婚し, この前後の時期に勅任視学官となり20年務めた (松浦ほか, 2005,手紙22). 勅任視学官は1839年創設されCambridge, Oxford両大を卒業した30歳前後の人物中心に採用し, 国内各地の学校査察を職務とした (高妻, 2007). 当時子供に「いろいろな所へ旅行ができる, うらやましい人」と映る職務像がFentonの「博物学的関心」に魅力だったかも知れない. 多少高齢 (40歳前後) だが日本での教職経験は適任資格と働いただろう. 勤務地としてLancashire Borough District 1895, Lincolnshire and Norfolkが記録される (C. Fenton私信).

Fentonの在任中に視学官の任務内容の改訂が度々行われ1890年の改正通達では「予告なしの学校訪問」頻度が増加した (高妻, 2007). この時期 (1892年) 田中舘宛の手紙 (松浦ほか, 2005, No. 21) で「規則変更で任務が忙しい」と告げた. その前1890年6月には田中舘に日本での復職を希望し, 応募先を尋ねる手紙を送った. 英国での勤務に満足できなかったのだろうか. 1891年9月にはCambridgeに家を取得し, 1893年6月には43歳で娘Sylviaを得てやや落ち着いた模様である.

OUTWARDS.

April 4, French steamer *Tibre*, Reynier, 1,726, for Hongkong, Mails and General, despatched by M. M. Co.
April 4, Japanese steamer *Kokonoye Maru*, Dithlefsen, 1,133, for Hakodate, Mails and General, despatched by M. B. Co.

PASSENGERS.

Per French steamer *Tibre* for Hongkong :—Messrs. Ganjot, E. Fischer, S. Peyre, Montague-Fenton and Soloweff.
Per *Hiroshima Maru*, for Shanghai and way ports :—Mr. J. G.

Fig. 5. Fentonの日本出発記事 [*The Japan Weekly Mail*, 1880年4月10日] (横浜開港資料館・蔵).
The article informing the departure of Fenton from Japan. [*The Japan Weekly Mail*, 10th Apr. 1880].

13. カナダへの移住

制度的な定年規定はなかったが, 1910年 (60歳) 頃に視学官を退職したと思われる. 1913年及び1923年に大英博物館 [後述], 1924年に田中舘 [松浦ほか, 2005] に宛てた何れもカナダからの手紙があるが, カナダへの移住時期はまだ確認できない. 1918年London在住の情報 (松田・中村, 2005) との関係は未解決である. カナダで一時Nanaimus 2 (Vancouver島) の住所を持ったが, 後にはRoyal Oak郵便局宛となった.

1867年東方から始まったカナダ連邦の成立は徐々に西方へ進んだ. 1885年開通したカナダ太平洋鉄道によって物資・人員の流通は増大し, 農業の大規模化と工業化が進行した. この間19世紀末から20世紀初頭に英国からカナダへ多数の移民があった. 英国での失業増大と, 西部開発に労働力を必要とするカナダ政府の思惑が合致し (森, 1987), 英領植民地でカナダだけが移民受け入れを歓迎した. Fentonのカナダ移住が上の流れと同じ理由だったとは思えないが, 経済的利点と「博物学」的な目的を含んでいたかも知れない. 次項に示すようにカナダで採集した昆虫を大英博物館へ送付している.

第一次世界大戦 (1914–1918年) を挟んでカナダの資本・経済支配は英国から米国主導に交代し, 不況が続いた (木村, 1999). Fentonは田中舘への最後の手紙 (1924年) で「(第一次世界大戦後の経済事情が) カナダでの前途の見こみを破壊した」と記し, 老後はカナダでの計画が潰えたことを伝えた. 経済的見込みを失った彼は, 娘Sylvia Watt夫妻の住む米国へ行くことを予定した. 時に74歳, もはや「米国に骨を埋める」心境だっただろう.

14. 大英博物館との関係

1880年代石川への手紙 (中村, 2007) にある通り, 日本から帰国後のFentonは石川を通じた日本の蝶などの譲渡仲介に積極的だった. この手紙で二度Elwes, H. J. (1846–1922) が登場する. Elwesはシナフトオアゲハ*Agehana elwesi*に名を残す蝶学者で*Luehdorfia*交尾嚢形成問題でもFentonに助言した (中村, 2007). 樹木学者として台湾を経て1912年日本を訪れた (Elwes, 1930; 江崎, 1956).

Elwesは資産家だったが自らも広く温帯各地を旅行する活動家で, 資料購入にも熱心だった. 彼は後に大量の蒐集物を大英博物館に寄贈したが, 奇矯な人でそれで物議を醸して居る (Riley, 1964). 博物館職員ではなかったが, 資料入手への関心から同年輩のFentonに協力して石川の資料譲渡に関与したと思われる.

交信により大英博物館Ackery, P. の示唆を受け, 同館Norman, D. Riley (1890–1979) の資料を探索し, Fentonとの交換書簡 (8通) と1通のリストを入手した (Appendices 2 & 3). Fentonは全てカナダから投函している. Rileyは1911年から同館で蝶類資料の受付を務め, 後に3代目昆虫部門部長 (1932–1955) となった.

1913年FentonはBritish Columbiaで得た蝶・蛾を二度にわたって博物館に送付した. Rileyはこれを同定し, 入用なものに購入価格を付けて返事した. 博物館の財政も乏しく, Fentonにとっては不本意な価格であった. 特に二度目の送付を受けたRileyは低価格の評定とともに婉曲にそれ以上の送付を断っていて, もはやカナダの資料が大英博物館にとって収集の対象でなかったと判る. 大英博物館側で蝶類資料価格の査定はGahan, C. J. (1862–1939) で, 1913年動物部門から独立した昆虫部門の初代部長 (1913–1927年) であった. 蛾類の入手評定はHampson, G. F. (1860–1936: 部長補佐代理) が行った. 査定結果は厳しいが何れも然るべき立場の人物が対応したと判る. 因みに1913年に昆虫部門が入手した昆虫は568件, 140,535点で, 記録の判明する範囲では購入が8,983点, 寄贈が14,952点だった (Riley, 1964).

Fentonの手紙には送金の遅延を催促するものがあり, 同じ1913年8月には英国Janson商会にもカナダの甲虫標本売却を依頼する手紙を出した (松田・中村, 2005). 標本の売買で生活を賄っていたのではないとしても, この時期Fentonは経済的に苦しかったのだろう. 田中舘愛橘宛の手紙に1900, '10年代のものはなく, 古い友人に便りを書く余裕や気分を失った時期と想像される.

General Delivery
Victoria B.C.
16-11-23
Dear Mr. Riley
I am writing to ask if you will be so kind as to paste the enclosed paper over the one already attached on the back of my pedestal Cabinet of Japanese lepidoptera, so that my daughter Sylvia will be able to claim it after my death.
Apologising for giving you this trouble
I am
Yours Sincerely
Montague A Fenton

Fig. 6. 標本棚にラベル貼付を求めるFentonの手紙⑦ (大英自然史博物館・蔵).
Fenton's letter asking a label pasting on his cabinet. (Coll. The Natural History Museum).

15. 日本の蝶コレクションの内容と譲渡

1921年Rileyが作成したFentonの日本の蝶リストには, 基準・準基準標本を含む15種28個体が記録されている (Appendix 4). Fentonが所有権を温存したまま大英博物館に寄託していたコレクションの一部と思われる. Butler記載の基準標本も含むのはFentonが採集者だったためだろうか.

日本から帰国するFentonに頼まれ, 石川千代松が送った標本群があった (中村, 2007). 無事英国に到着した中に基準標本も含まれていたと見られる. Fentonが英国帰着の1880年は大英博物館・自然史部分のSouth Kensington移転時期だった.

部長補佐昇任直後のButlerはこれらの資料を利用し, Fentonを準著者として待遇した報告 (1881年) に記載した. その後Fentonは学業と職務上, 英国内の各所を移動したが, これら資料を標本棚ごと大英博物館に寄託して40年以上所有権を手放さなかったことが判る.

1923年春Rileyとの交信でこの日本産蝶類の措置が合議の対象となった. 初めFentonは自らの蒐集を納める脚付標本棚 (Pedestal Cabinet) に, 自分の死後も娘Sylviaに判るラベル貼付を求めた (Fig. 6). Fentonはこの時73歳, 身辺整理の時期と考えたのだろう. Rileyはこれを承諾した上で,「再度」として資料購入問題の解決を求めた. 合議の結論を示す手紙はないが, 交信の結果Fentonが売却を決心したことは間違いない. 大英博物館は1923年7月これらを購入登録 [1923-613] した (松田・中村, 2005). 2005年現在既に同館にこの標本棚は現存しない (Ackery 私信). 因みに1923年に昆虫部門が登録した昆虫資料は全部で615件, 142,985点であった (Riley, 1964).

16. 今後の課題

大英自然史博物館のButlerに関する資料は整理されてなく, 現在参照出来ない. Fentonと最も密接な交流があったButler側の資料が見られれば重要な情報が得られる可能性が大きい. 今の所Fenton自身の書いた文書は手紙だけが参照できた. しかし帰国10年後田中舘に出した手紙 (松浦ほか, 2005) には正確な「日本文字」が写されており, Fentonが在日中に自ら「記録」を作り後まで保存していたことは確実である. 70年前米国に没したFenton周辺の遺族と資料探索が迫られた課題である.

謝　　辞

Phillip Ackery及びGoulven Keineg両氏 (大英自然史博物館) には同館所蔵資料の教示・入手でお世話になった. Colin Fenton氏 (Cambridge在住) はM. A. Fenton氏の個人情報及びP. & O. 社関係者Stephen

Rabson氏の情報をご提供頂いた. 文部省往復文書は東京大学大学史史料室資料を参照した. 往復文書の解読に関し, 石川健氏 (宇都宮市), 英文手紙の讀解と本稿英文作成で小林隆久氏 (宇都宮大名誉教授), 各文献利用の上で, 大英博物館に関し広渡俊哉氏 (大阪府大), 勅任視学官に関し高妻紳二郎氏 (九州産業大), Rymer Jones氏に関してサッカー関連事項で阿部生雄氏 (筑波大), Scotland学派関連事項で北政巳氏 (創価大) の各位に懇切な教えを受けた. これらの方々に厚く御礼申し上げる.

参考文献

ベイツ, H. W., 1996. 長沢・大曽根 (訳). アマゾン河の博物学者. 509, 33 pp. 平凡社.
バークス, A., 1985. 長谷川精一 (訳). 西洋から日本へ—お雇い外国人—. バークス, A. (編), 梅渓 (監訳), 近代化の推進者たち: 179–199. 思文閣出版.
Dixon, W. G., 1882. *The Land of the Morning*. Edinburgh. 689 pp. Reprint 2003. Japan in English. 18 & 19. Ganesha Publ. Ltd. London.
Elwes, H. J., 1930. *Memoirs of Travel, Sport, and natural History*. 317 pp. Ernst Benn Ltd., London.
江崎悌三, 1955. 日本昆虫学史話 (2). 昆虫 **23**: 182–189.
———, 1956. 日本昆虫学史話 (3). 昆虫 **24**: 139–145.
福沢諭吉, 1962. 西航記. 福沢諭吉全集 **19**: 6–65. 岩波書店.
Gunther, A. E., 1975. *A Century of Zoology at the British Museum*. 533 pp. Dawsons of Pall Mall.
石川千代松, 1929. モールス先生. 科学知識 **6**: 180–187.
———, 1936. 老科学者の手記. 石川千代松全集 **4**. 424 pp. 興文社.
石附　実, 1986. 教育博物館と明治の子ども. 231, 4 pp. 福村出版.
磯野直秀, 1987. 黎明期の日本に対するエドワード・S・モースの寄与. 嶋田正ほか (編), ザ・ヤトイ: 272–291. 思文閣出版.
イラストレイテッド・ロンドン・ニュース・日本通信. 金井圓 (訳), 1973. 描かれた幕末明治. 345 pp. 雄松堂書店.
川路柳虹, 1953. 黒船記. 242 pp. 法政大学出版.
木村和男編, 1999. カナダ史. 363, 62 pp. 山川出版.
北　政巳, 1983–4. 近代技術の運搬者①–⑦. 自然 1983年9月–1984年3月連載.
———, 1984. 国際日本を拓いた人々. 292 pp. 同文館出版.
———, 1987. 工部大学校都検ヘンリー・ダイヤー. 嶋田正ほか (編), ザ・ヤトイ: 292–313. 思文閣出版.
———, 1998. 近代スコットランド移民史研究. 329 pp. 御茶の水書房.
北根豊・鈴木雄雅 (監修), 1995, 1997. 日本初期新聞全集 **53–56**, 補 **2**. ぺりかん社.
旧工部大学校史料編纂委員会, 1978. 旧工部大学校史料・同付録. 356, 257 pp. 青史社.
高妻紳二郎, 2007. イギリス視学制度に関する研究. 295 pp. 多賀出版.
松田真平, 2007. フェントンの生涯のいくつかの未解明部分. やどりが (213): 52.
松田真平・中村和夫, 2005. 明らかになったFentonの生涯. 蝶と蛾 **56**: 247–256.
森　建資, 1987. 第一次大戦前のイギリス移民とカナダ農業. 椎名重明 (編), ファミリー・ファームの比較史的研究: 209–233. 御茶の水書房.
ミュージアム氏家, 2003. シルビアシジミ発見物語 [47回企画展・図録]. 80 pp. ミュージアム氏家.
中村和夫, 2002. フェントンの栃木県旅行と蝶採集. インセクト 53: 14–24.
———, 2007. M. A. Fentonから石川千代松への手紙. 蝶と蛾 58: 317–340.
松浦明・松田真平・中村和夫・小竹弘則, 2005. M. A. Fentonから田中舘愛橘に宛てた手紙. 蝶と蛾 **56**: 145–164.
内藤　孝, 1987. 横浜居留地とW・E・グリフィス. 嶋田正ほか (編), ザ・ヤトイ: 65–99. 思文閣出版.
名和　靖, 1910. 昆虫学に関係ある大家の略歴 (2) エッチ・プライヤー氏小伝. 昆虫世界 **14**: 113–115.
岡野喜久麿, 2001. フェントンのこと. やどりが (190):14–15.
大蔵省 (編), 1931. 工部省沿革報告 明治前期財政経済史料集成 **17**. 765 pp. 改造社.
Pocock, R. I., 1926. Dr. Arthur Gardiner Butler. *Proc. Linn. Soc. Lond.* **1926**: 75–76.
Riley, N. D., 1925. Dr. A. G. Butler. *Entomologist* **58**: 175–176.
———, 1964. *The Department of Entomology of the British Museum* 1904–1964. 48 pp. XIIth inter. Congr. Ent.
リン・バーバー, 高山宏 (訳), 1995. 博物学の黄金時代. 431, 21, xiii pp. 国書刊行会.
Stearn, W. T., 1981. *The Natural History Museum at South Kensington*. 414 pp. Heinmann, London.
東京帝国大学, 1932. 東京帝国大学50年史 (上). 東京帝国大学.
立脇和夫, 1996. 幕末明治在日外国人・機関名鑑: *Japan Directory* **1** (1861–1875). ゆまに書房.
ユネスコ東アジア文化センター, 1975. 資料御雇外国人. 493 pp. 小学館.

ウォレス A. R., 新妻昭夫 (訳), 1993. マレー諸島. 上563 pp./下 580 pp. 62筑摩書房.

Summary

1. Profiles of an English pioneer Entomologist in Japan, Montague Arthur Fenton, have been a little by little clarified recently, including exact routes of his collecting journeys in Japan, and also with his life after he went back home in England.

2. Unclarified important question is on his direct purpose and time of visit to Japan. As he worked as a sincere English teacher in Japan from January of 1874, that role was hitherto regarded as important. A recently found document, however, told that the job was occasionally offered to him after his arrival in Japan.

3. From a newly found newspaper article, the name "Mr. Fenton", with Miss A. Fenton, can be found in the passengers list of English steamer *Avoca*, arrived at Yokohama on 28th July 1873.

4. Another article tells that his sister Isabella Fenton got married to R. O. Rymer Jones on 2nd Aug. 1873 at H. B. M.'s Legation in Edo. Although it is not yet sure whether "Mr. Fenton" is identical with M. A. Fenton himself or not, it can be highly presumable that primary motivation of M. A. Fenton's trip to Japan was to accompany and attend his sister's marriage ceremony in Japan.

5. It is estimated that Fenton had an acquaintance with A. G. Butler of The British Museum before coming to Japan. Fenton's ambition to survey butterflies and other insects of Japan, which were poorly known to European knowledge at that time, might have encouraged his expenditure to the oriental region, as a young naturalist of that Victorian age, probably preparing a several-year stay from the first.

6. Fortunately he found a job as an English teacher, and this supported his stay aferwards in Japan. Employment in the Govermental Institution afforded his journeys throughout the country. Besides, nature, cultures and human-relations he met in Japan, which he was fond of so much, might have prolonged his schedules.

7. He left Japan on 4th Apr. 1880 after his 6-years and 8 months stay in Japan. During that period, his collecting tours covered the eastern mainland and Hokkaido of Japan.

8. Correspondence between Fenton in Canada and Riley, N. D. of the British Museum is printed in this paper. In the letters in 1913, Fenton sent insect specimens of Canada twice requesting to purchase them. The Museum purchased them at a little expence.

9. His collection on Japanese butterflies including type specimens were already deposited in the Museum at the time of 1921. After consulting on it by the letters of 1923 between Riley and Fenton, the specimens were registered by the Museum in 1923. Fenton was seventy-three-year old at that time and he probably considered after his death.

10. From the letter of Fenton, it can be supposed that he had great attachment for that collection as well as his love for the experiences and friends during his stay in Japan.

11. M. A. Fenton has hitherto been considered to be an English teacher of foreign employee, and collected insects as a side-buisiness. Now, his purpose of visit to Japan seems to be altered into a motive as a Victorian naturalist, who was intentionally interested in the unrecorded insect faunas and in surveying them in Japan.

(Accepted August 7, 2007)

Appendix 1. フェントンがギュンターへ宛てた手紙(大英自然史博物館・蔵)・和訳. Günther書簡[大英博物館蔵]

46 Linden Gardens
High Road
Chiswick
April 9th /85
My dear Sir
In reference to our
conversation on Sat.
Mar. 21st ult. concerning
the post for the Coleoptera,
you may remember sug
-gesting that the matter of
age in excess of the extreme
limit might be waived,
and the Civil Service
Examination avoided, by
taking me on as a
supernumerary for a short
time in preparation or on
trial. May I ask when
the duties appertaining to
the post should begin,
as I feel myself bound
(not legally) to finish
demonstrating in the
course of Practical
Biology in the Camb.
Univ. Lab. & not to leave
Mr. Sedjwick in the lurch.
The course continues
to the end of next May.
I am Sir
Yours obediently
Montague A.Fenton
Dr. Günther
Nat.Hist.Mus.
S. Kensington

リンデンガーデン
ハイロード
チズウィック
1885年4月9日

親愛なる閣下
先月3月21日土曜
鞘翅目の職についての
私達の話の中で, 私を
短期間だけ定員外職員の
準備, つまり試しに
採用するのなら
年齢制限が外されるかも
知れないし,
公務員試験を
受ける必要がないと
仰せになったこと
を覚えておいででしょうか？
その職に関連する責務は
何時から始まるのでしょうか？
何故なら私は (法的にでは
ありませんが) ケンブリッジ大
応用生物学コースの実験を
終わらせる責任を負い,
セジュウィック氏に任せる
わけには行かないのです.
このコースは次の5月末
まで続きます.

敬具

モンタギュAフェントン
南ケンジントン
自然史博物館
ギュンター博士御中

Appendix 2. Correspondence between Riley N. D. and Fenton, M .A. (Coll. The Natural History Museum).

Letter	Riley wrote	Fenton wrote
①	1913.viii 5 →	
②		← 1913.viii 24
③		← 1913.xii 8
④	1913.xii 29 →	
⑤		← 1914. i 21
⑥	1914. iii 6 →	
List	[1921.v 16]=Appendix 4	
⑦		← 1923. ii16
⑧	1923. iii 5 →	

in [ ]: crossed out letters.
{ }: inserted letters.

Letter① [BM paper: Handwriting draft]
Dear Sir
5. VIII.13
In reference to the Lep you forwarded to the Museum
Some time ago from Nanaims, Vancover 2, I am[afraid there are not many we wish to keep.]able to give you the following details.
I have entered {my pr list} the names of all the butterflies as far as I am able to__.
It is not always easy to identify unset material__ ; those which the Museum would like to keep I have marked with a tick (レ); for the moth(x) I am unable to obtain names, though Sir George Hampson tells me [there are some which he would like to keep]he does not want any of them.
Of the twelve specimens marked as wanted, 9 are from new localities, the other 3 being forms apparently unrepresented in the Museum Collections, viz a Chrysophanid & 2 skippers. Chrysophanid=
I have spoken to Mr.
Gahan with regard to making an offer for the specimens, but he finds himself unable to give more than £1 for them __i.e. the twelve selected specimens.
Of course if you do not want the other specimens seted we shall be pleased to keep them, but are unable [to nam] to give you anything for them. I might also suggest that a very usual arrangement the Museum enters into is to keep specimens in exchange for names. 」
I am enclosing your list, but retaining the specimens for the present, and to be pleased to hear whether this offer is acceptable to you.
Your faithfully
MA Fenton
Enq ND Riley
[2] 5th Aug. 1913

Letter②
W. D. Riley Esq Post Office
Royal Oak
Victoria B.C.
24 August 1913
Dear Sir
I am in receipt of your letter of 5th inst. for which I am much obliged, returning to me the list of B.C .lepidoptera.
I accepted Mr.Gahan's offer as to the sum of £1, in view of his statement of the small amount of fund available for the B.M.
The unbought specimens are at the disposal of the B.M.
I send a small box of specimens with a list of things caught since my first consignment but I have been too busy to collect many.
Kindly note my change of address.
Yours sincerely
M.A.Fenton
(new list enclosed)

Letter③
Post Office
Royal Oak
Victoria B.C
8. XII.13
Dear Mr Riley
In reference to
your letter of 5th
August stating that
Mr Gahan offered
£1 for 12 specimens
received from me,
I wrote to say that I accepted,
but so far have
not received
any such remit
tance.
No reference
has been made
to a further
consignment of
specimens sent
with my letter.
Yours faithfully
M.A.Fenton

Letter④
[BM paper: Handwriting draft]
D Mr Fenton 29.XII.13
In reply to yours of 8th Dec.
I regret that no remittance has reached you as yet in respect of the specimens received from you. The amount will be forwarded you shortly after the next meeting of the Mus tea and shall reach you sometime in February 1914.
With regard to the further consignment of specimens received in Sept. last and for which thro' some oversight no acknowledgement has been sent; I have been thro' the butterflies and have marked some 15 of them which I sh'd like to retain. Mr Gahan tells me however that he is unable to offer more than ten[10] shillings for them having regard to the numbers of more valuable collections for which money is required. In view of these facts it may seem to you scarcely worth while sending us further specimens for purchase, thou I shall always be pleased to receive butterflies [specimens] in exchange for names.
Sir George Hampson tells me the moths are all common species and does not require any of them.
I am keeping the specimens and the list until I hear from you.
Yours
NDR

Letter⑤
Post Office
Royal Oak
Victoria B.C.
21st Jan.1914
Dear Mr Riley
Thanks for your letter of 29th ult.
I think Mr Gahan puts a
very small value on the fifteen
butterflies you are retaining
but I have no recourse but to
submit to the terms.
I suppose the two remittances
will be sent together.
I hope there was something
of interest in the fifteen sent.
I am looking forward to
having the list. I am not
so well placed here as I was
in Nanaims but hope to be
able to make some trips into
the moutains next season.
The weather has been
very mild but stormy
up to date.
I trust we shall 」

not have to pay for it
by having a cold spring.
Yours faithfully
M.A.Fenton

reverse direction
Feb 8
12 Rhop　Canad £1　0　0
15 "　　　　10　0
(very faint)

Letter⑥
[BM paper:Handwriting draft]
6.3.14
D Mr Fenton
I am returning you[your] the list of specimens sent in your last consignment and hope it will be of use to you.
I trust a remittance from the Museum has reached you by now.
Shall I return you the specimens we do not require?
I should like to point out that I am going considerable out of my way in naming for you insects for which we are paying.
I [have no]am pleased at any time to name things provided we receive some in exchange for the names.
[estim. Riley]

Letter⑦
[paper : 42, VICTORIA AVENUE, WHITLEY, R.S.O. NORTHUMBERLAND.]
General Delivery
Victoria B.C.
16-ii-23
Dear Mr Riley
I am writing
to ask if you will
be so kind as to
paste the enclosed
paper over the
one already attached
on the back of
my pedestal cabinet
of Japanese ⌋
lepidoptera, so
that my daugther
Sylvia will be
able to claim it
after my death.
Apologising for
giving you this
trouble.
I am
Yours sincerely
Montague A.Fenton

Letter⑧
[BM paper:Typewritten draft]
5th March 1923
Dear Mr Fenton,
I am in reciept of your letter of 16th February and have had the label, which you enclosed, pasted on the back of your pedestal cabinet of Japanese Butterflies, as requested.
Should you care to reconsider the question of disposing of this collection I should be pleased to hear from you and to go into the question again, with a view to purchasing either the type specimens contain- in it, separately, or the collection as a whole.
[In the latter case of course the price should include the cabinet, preferably, as the cost of sending that to you empty would be so high]

Yours sincerely
signature [ND Riley]

Appendix 3. ライレイ, N. D. とフェントン, M. A. との往復手紙 (大英自然史博物館・蔵).

N. D. Riley →← M. A. Fenton 往復手紙 8 通 [大英自然史博物館・所蔵]
[注記 : Fenton 氏の手紙は受け取った全文. Riley 氏のものは下書きなので, 発送した手紙では変更があった可能性を含む]

① 1913年8月5日
拝啓. 貴方が以前 Nanaims, Vancouver 2 から博物館へ送られた鱗翅類に関して以下の詳細をお伝えします.
リストの全ての蝶に出来るだけ名前を記入しました. 展翅していない標本を同定するのは必ずしも容易でありませんが, 博物館が保管したいものについては印(ﾚ)を付けました.
蛾(x)については名前が判りませんが, G. Hampson 卿はどれも必要としないと言っています. 必要と印した12標本の内, 9頭は新産地のものです. 他の3頭, 即ちベニシジミ1頭とセセリチョウ2頭は明らかに博物館収蔵の標本になりません.
私は Gahan 氏と標本の売値について話しましたが, 彼はこれら選んだ12標本について1ポンド以上は出せないと言っています.
他の標本群も貴方が要らないのなら喜んで保管します. しかし, 代金はお支払い出来ません. そして通常の博物館の手順に従って, 標本に名前を付けて保管することになります. 貴方のリストは同封しますが, 標本は当面お預かりします.
貴方がこの申し出を受理できるかお返事を聴ければ幸いです. 敬具
M.A.フェントン様 ND ライレイ

② 1913年8月24日
W. R.ライレイ様
今月5日のお手紙で, British Columbia の鱗翅類のリストをお返しいただき感謝しています. BM が利用できる基金が少ないとの Gahan 氏の言明に鑑み, 私は彼の申し出, 即ち合計1ポンドを承知します. 購入しない標本については BM にお任せします.
最初の委託品の後に捕らえた標本とリストを小箱に入れてお送りします.
沢山のものを集めるには私は忙しすぎました.
住所の変更にご留意ください.
敬具
M.A.フェントン [新リスト同封します]

③1913年12月8日 ライレイ様
拝啓. 8月5日の貴信に関し, 私からの12標本に1ポンドという Gahan 氏の申し出を承知した, とお

手紙しましたが, 今の所未だその送金はありません. 手紙と共に送った追加の標本委託品についても何の言及もありませんが.

④1913年12月29日 フェントン様
12月8日のお便りに関し, 貴方の標本に対する送金が届いていないことは申し訳ありません. お金は次の博物館茶会の直後にお送りし, 1914年2月には届くと思います.

去る9月に受け取った更なる委託品に関しては, 手落ちによって受け取りが送られていません. 私は蝶にすっかり目を通し, その15頭ほどは頂きたいと思います.

しかしGahan氏は, 他に多くのもっと価値ある蒐集にお金が必要で, これらに対し10シリング以上はお支払いできないと言っています.

これらの事情から, 我々あて更なる標本を, 購入のためにお送り下さる意義は殆どないと思います. ただし, 私はいつでも喜んで蝶を受け取り名前を調べますが.

G. Hampson卿は蛾が全て普通種で, どれも不要と申されました. お返事を頂くまで標本とリストを保管します. 早々 ライレイ

⑤1914年1月21日
ライレイ様
先月29日のお便り有り難うございました. 貴方の保管する15頭の蝶に関し, Gahan氏はごく僅かな評価しか与えていないと思いますが, お申し出の価格に従います. 二つの支払いは一緒にお送り下されば幸いです.

お送りした15頭中に何か興味あるものがあるといいのですが.

リストを待っています. Nanaimsに居た時よりもここは地の利が劣りますが, 次の時期には山地帯へ行って見たいと思っています. この所荒れ模様ですが, 気候は大変穏やかです. 冬が楽な分, 代わりに春が寒いということがなければいいのですが. 敬具
M.A.フェントン

⑥1914年3月6日
フェントン様
先日の委託品の標本リストをお返ししますが, お役に立てば幸いです.

博物館からの送金が到着した頃と思います. 我々が必要としない標本をお返ししましょうか? 我々が購入する昆虫に, 随分回りくどいやり方で名前を付けていますね.

ある程度まとまった数を受け取ればいつでも喜んで名前を付けます.

[署名なし: 推定ライレイ]

⑦1923年2月16日
ライレイ様
お便りするのは日本の蝶を入れた私の脚付き標本棚のことです. 前からその背面には紙が貼ってありますが, その上に同封する用紙を貼って頂きたいのです. 私の死後, 娘シルビアが所有権を主張出来るようにするためです.

ご迷惑をお掛けして申し訳ありません. 敬具
M.A.フェントン

⑧1923年3月5日
フェントン様
2月16日の貴信を受け取り, 同封された用紙をお申し出のように, 貴方の日本の蝶・標本棚背面に貼りました.

このコレクションをどうするか, の問題を再度お考えになってお返事を頂けませんか. 購入に際し, この中にある基準標本だけにするか, コレクション全体とするかの問題を解決出来ると幸いです. [後者の場合, お望みなら勿論価格は標本棚を含みます. 棚を空で送るのは高く付くでしょうから]

Appendix 4. Fentonの日本産蝶リスト (Riley作成: 活字化) (大英自然史博物館・蔵).
Appendix 4. Fenton's collection of Japanese butterfly list (made by Riley, N. D., its typing). (Coll. The Natural History Museum)

FENTON COLL.
(List of Type Specimens in)

	Type	Cotype	[Japanese name 訳注]
Dt. 1. *Araschnia obscura* Fenton	1♂	1♂	アカマダラ
2. nil			
3. *Erebia scoparia* Butler	1♂	1♂	ベニヒカゲ
4. *Grapta lunigera* Butler	1♂	–	シータテハ
Vanessa connexa Butler		2♂	コヒオドシ
5. nil			
6. *Lycaena pseudoaegon* Butler	1♂1♀	1♂1♀	ヒメシジミ
〃 *iburiensis* Butler	1♂		イシダシジミ
〃 *alope* Fenton	1♂1♀		シルビアシジミ
7. *Thecla ibara* Butler	1♀		ウラキンシジミ
〃 *orsedice* Butler	1♀		ウラクロシジミ
〃 *butleri* Fenton	1♀		ウスイロオナガシジミ
〃 *regina* Butler	1♀	1♀	ミドリシジミ
〃 *signata* Butler	1♀		ダイセンシジミ

	*Strymon fenton*i Butler	1♀	1	カラスシジミ
8.	nil			
9.	nil			
10.	*Papilio dehaanii* var. *tutanus* Fenton	1♂1♀	1♂–	カラスアゲハ
11.	nil			
12.	*Leptosia morsei*	1♂1♀	1♂	エゾヒメシロチョウ
		8♂10♀	7♂3♀	

ie 18 Types
10 Cotypes

16/5/21
NDR

Published by the Lepidopterological Society of Japan,
5-20, Motoyokoyama 2, Hachioji, Tokyo, 192-0063 Japan